

吹田操車場遺跡の調査

吹田市教育委員会
公益財団法人大阪府文化財センター

はじめに

吹田市教育委員会と公益財団法人大阪府文化財センターでは、今年8月からJR岸辺駅北側駅前広場隣接地（吹田市岸部新町）において、吹田操車場跡地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査を行っています。吹田操車場遺跡は、かつてJR吹田駅から千里丘駅までの間にあった吹田操車場の跡地を中心とする遺跡です。

これまでの調査では、古墳時代から奈良時代（約 1250 年～ 1500 年前）までの粘土採掘土坑や、飛鳥時代から平安時代（約 1000 年～ 1350 年前）の掘立柱建物、鎌倉時代から室町時代（約 600 年～ 900 年前）の畠や井戸がみつかっています。

今回の調査成果

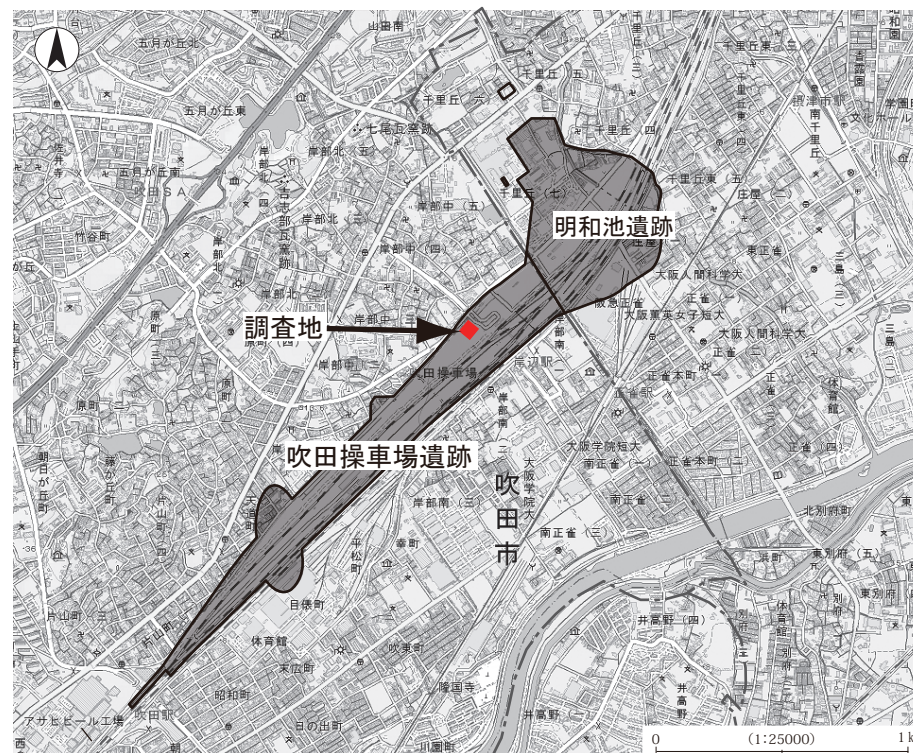
今回の調査では、古代の建物群が検出されました。建物群は奈良時代（8世紀中頃以降）と、平安時代（10 世紀前半）の2時期のものが存在します。このなかで注目されるのは、平安時代の大型建物群です。

平安時代の建物は4棟みつかっています。平安時代の建物のなかで中心となるのは、四面に^{ひし}廂を巡らせる「四面廂建物」という特殊な構造を持つ建物で、当時の一般的な建物よりも格式が高いものです。また、その真北に屋根を接する形で^{しめんびきたてもの}総柱建物が並んでいます。

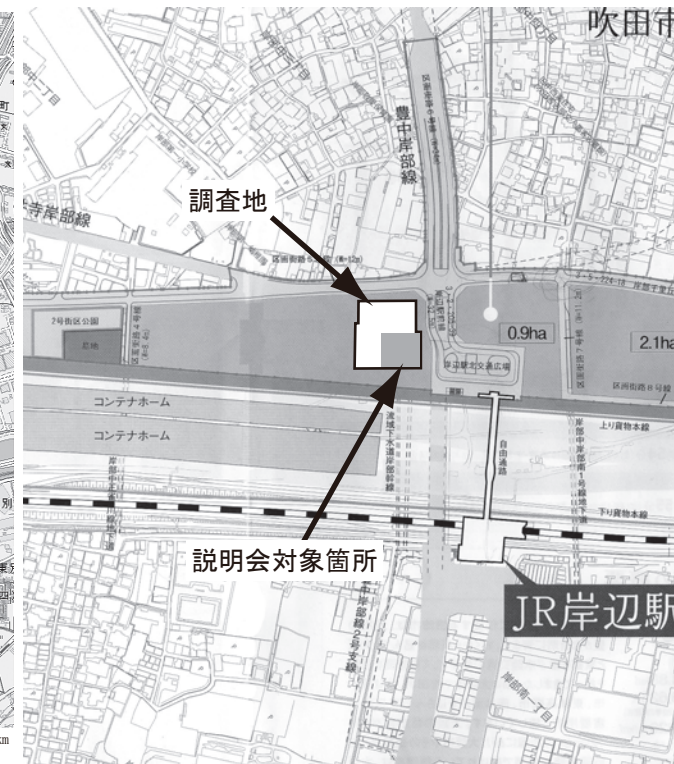
四面廂建物の面積は 99.9 m²、その北側の総柱建物は 93.15 m²です。いずれも 100 m²近い面積の建物で、当時としては大型の建物となります。総柱建物は内側の柱穴^{ゆかつか}が外周の柱穴よりも浅いことから、それらは床を支える床束と考えられ、床張り建物であったと想定されます。

また、四面廂建物と総柱建物の間には柱穴列がみつかっています。この柱穴列は廊下^{とい}状の構造物を支えた柱の痕跡、もしくは軒先が接する場所にあたるため樋を支えていた柱の痕跡と想定され、2棟は繋がっていた可能性が高いと言えます。

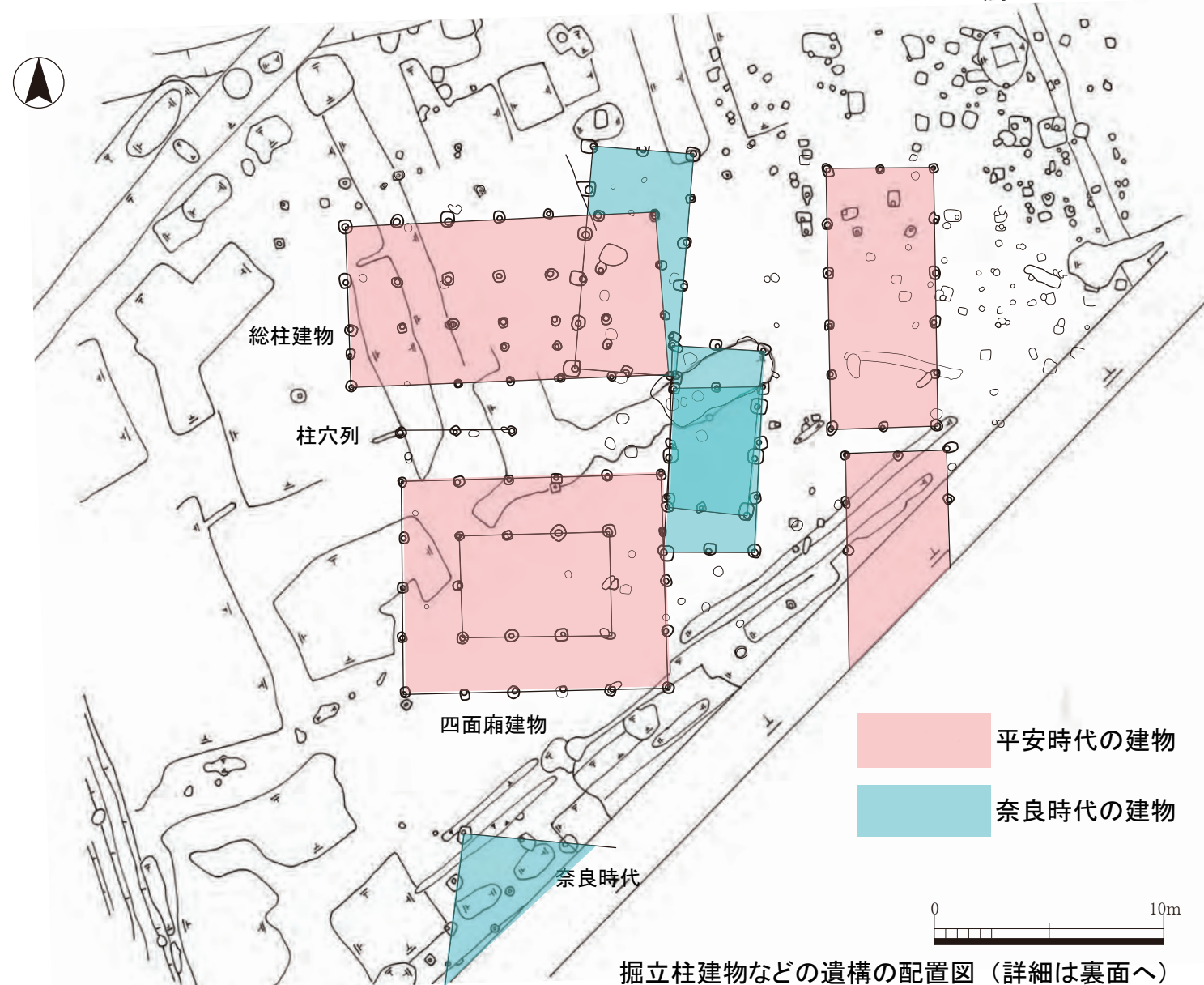
建物の周辺からは、^{りょくゆうとうき}緑釉陶器や^{かいゆうとうき}灰釉陶器などの高級食器類が出土しています。これらの食器類は、一般の集落遺跡から出土することはほとんどなく、上記建物の所有者はこのような高級食器を手に入れることができる階層の人物であったといえます。



遺跡の位置



調査地

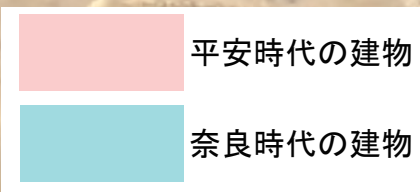


掘立柱建物などの遺構の配置図（詳細は裏面へ）

吹田操車場遺跡でみつかった古代の建物群



縦長建物の北側で、土師器の皿二枚を重ねた土坑がみつかりました。地鎮遺構と考えられます。



南北縦長の建物

すべて同時併存していたわけではありませんが、建物の向きと柱筋が一致することから四面廂建物に付属する建物と考えられます。

奈良時代の建物

四面廂建物に先行するものです。

総柱建物

この建物の内側の柱穴は、外側の柱穴よりも浅いため、床を支える床束であった可能性が考えられます。そうすると、この建物は床張り建物であった可能性があります。

建物間の柱穴列

四面廂建物と総柱建物の間には、等間隔に並ぶ柱穴列があります。廊下状の構造物、もしくは軒先が接する場所に通した樋を支えていた柱の痕跡と思われます。

四面廂建物

建物の四面すべてに廂を設けています。四面廂建物は一般的な庶民の住居建物よりも格式が高く、飛鳥時代から平安時代にかけては宮殿、官衙、寺院、神社、有力貴族の邸宅に用いられました。



建物群の周辺からは緑釉陶器、灰釉陶器などの施釉陶器が出土しています。これらは平安時代の高級食器です。



施釉陶器以外にも当時の食器である須恵器、土師器、黒色土器が出土しています。

外周の廂

もや身舎

外周の廂

